

氏名	呉 剛
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博甲第1729号
学位授与の日付	平成10年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	An Analytical Approach to Emily Dickinson's Negative Imagery from the Viewpoint of Suffering, Death and Immortality (エミリィ・ディキンソンの苦悶・死・不滅の観点から見たネガティブ・イメージリーの分析的研究)
論文審査委員	教授 古川 隆夫 教授 西前 孝 教授 貝原 洋二 助教授 寺岡 孝憲 広島大学大学院社会科学部教授 稲田 勝彦

学位論文内容の要旨

本論文は、アメリカの大詩人エミリィ・ディキンソン(1830-86)の約40年間にわたる先行研究成果を踏まえた上で、呉剛氏独自の作品分析によるこの詩人への新たな解釈の局面を見いだそうとする論文であり、序章、第1章から第3章、結論、書誌等、224頁からなる英文の論稿である。

序論では、これまでのディキンソン研究の動向が概観され、次のような幾つかの観点が集約されている。彼女は生前ほとんど作品を発表しなかったことから、その作品の編集に関わるテクスチュアル・クリティシズムの問題(T.H. Johnson, R.W. Franklin等)がある。主要なテーマは2千篇に近い膨大かつ難解な作品の解釈の問題(C. Anderson, D. Porter, J. Cody, J.D. Eberwein, E. Phillips, I.N. Kher等)である。次に、千編を越えるこれまた膨大な書簡と作品との問題(T.H. Johnson, T. Ward, J. Leyda, R. Sewall等)、あるいは謎につつまれた隠遁的生活と作品との問題(R. Sewall, M. Jenkins等)がある。さらには、詩型・リズム・押韻等にかかわる詩学の問題(B.S. Lindbergほか)、南北戦争等の時代背景あるいは文化的・文学的背景との問題(L. St. Armand, J.F. Diehl, J. Capps等)、詩人の書簡や作品に見られる哲学・宗教観の問題(C. Woolf, W. Sherwood等)、フェミニズムの観点からの研究(S. Juhasz, W. barker, V.R. Pollak等)、その他がある。

呉剛氏は、これらの中で中心的な問題とも言える作品解釈を大枠とし、研究方法としてはニューアー・クリティシズムの方法、即ち他の研究成果や批評の観点を援用しつつ新たな作品解釈を求める方法、及びインターテクスチュアル・クリティシズム、即ち作品間の関連性を重視する方法によっている。同氏にとっての作品解釈は9つの段階があるとしてC.アンダーソン(1960)、D.ポーター(1966)以下、主要な研究歴をまとめている。

第1章では、ディキンソンの詩における深い悲哀の表現としての〈苦しみ・苦悶〉が扱われる。1860年代初期の彼女の作品ではそれらがストレートに表現されている。彼女は思想的にはエマソンの超絶論から多くの影響を受けているが彼にはそれほど〈苦しみ〉の論議はない。彼女の描く苦しみには〈家庭的な〉いわば卑近な〈苦しみ〉が多いが、彼女は〈苦しみ〉と〈苦悶〉の真の特性を知っていた。〈苦しみ〉が昂ざると〈絶望〉に至るが、そうした精神的な危機はまた〈孤独〉をも強いることになる。〈苦しみ〉に関する

彼女の最大の特色は、ほとんどすべての局面において見られる、彼女の個人的な内省の深さと広がりであると言う。

論者は、詩人の描く〈苦しみ〉に幾つかの局面を見ている。そのもっとも激しいものは〈絶望〉に至り、命の消滅の危惧にさらされ、一種の静的なく死の中の生〉が生じ、時空が空ろになる。それが〈苦しみ〉の本質である。詩人はたとえそうした立場に身を置いても、超然と、ある場合はユーモアをもって眺めることができると言う。本論文の特色の一つはそうした特色の分析にある。

更に顕著な詩人の技法はその〈擬人化〉にある。詩人は、苦しみ、苦悶、絶望、死といったネガティブで抽象的なものを〈擬人化〉し、それをパントマイムの儀式、討論形式、あるいは日常会話として様々に表現している。そのことを様々な角度から分析している。その〈擬人化〉の技法こそがディキンソンの詩の持つもっとも大きな特色であると言う論点が、本論文を貫く統一的なテーマとなっている。

第2章では、〈死〉の意味が探究される。ディキンソンの〈死〉との長い対話の詩的な記録は、彼女の作品の多くの部分を占めるだけでなく、もっとも魅力的な深遠な考察となっているという。初期のころからすでに死者や死そのものとの頻繁な会話が見られるが、しばらくすると詩人は己自身の死を、つまり自殺をしばしば描くけれども、決して不思議に思っていない。なぜならそれは彼女のパフォーマンスだからであるという。

詩人の〈死〉への関心は次第に深まり、肉体の崩壊から化石化へと進み、生者と死者の間の修復できない永遠の隔離へと深まって行く。こうした場合でもやはり擬人化が用いられている。ひとつには、社会的・儀式的な擬人化であり、たとえば〈死〉は民主主義者、独裁者、御者、使者、求婚者、侵入者、誘拐犯人等になる。今一つは、心理的な擬人化であり、〈死〉は上品で親切であるかと思えば、無慈悲で強制的で、獣的であったりする。しかしディキンソンの描く〈死〉はひとつの役割から他の役割へとその性格を変えていると、論者は分析している。変化自在なネガティブな〈死〉が能動的なく動き〉を見せるといふ推論が展開されている。

第3章では、1・2章での〈絶望〉や〈死〉と切り離すことのできない〈不滅と永遠〉の問題が扱われている。詩人は、この世と〈死〉と〈不滅〉との神秘的な関係を〈円周〉という特別の意味内容をもった言葉に集約させており、詩人はその〈円周〉の仕事に終生深く関わり続けたことが述べられている。これらの関係を論者は次のように捉えている。〈自己〉の本質は〈時〉の動く次元で成長する。それが〈時〉の次元を超えた〈死〉と出会うことによって〈自己証明〉をやめるが、その時初めて、本来の自己たる〈魂〉の存在に気づくのだという。

しかし詩人がその〈魂〉を深く探究しても、永遠・不滅と表裏の関係にある神を完全に確認したり、拒否したりすることにはならない。なぜなら、神への信仰は希望を求める冒険であり、猜疑の危機もあるからだという。

結論部では、上記3章の内容がまとめられているが、さらに〈魂〉〈不滅〉〈永遠〉の関係が追求されている。〈永遠〉は常に存在する〈時〉を超えた秩序として人々の背後にある。一方、〈不滅〉は時空が終わるとき、個人の終局と将来の存在の一期間として人々の前にある。〈魂〉はこうした異なった力としばしば対立する力の間のバランスを維持しようとする規制力を持っている。人々を満足させるものは、ディキンソンによれば〈花崗岩のような信念〉、個性的な自己、神の前での不滅への予測である。それらは、揺るぎない〈魂〉と密接につながっているからであると、結ばれている。

論文審査結果の要旨

審査委員会は、招聘教授を含む5名の審査委員で構成し、審査に当たった。序論、第1章から3章、結論、書誌からなる英文224頁の本論文を詳細に審査した結果、審査委員

が共通して評価した点は以下の通りである。

(1) 吳剛氏は、エミリー・ディキンソン研究の多岐にわたる40年間の研究とその動向を整理し(論文「序」参照)、それを踏まえた上でニューアー・クリティシズムの方法、即ち他の研究成果や批評の観点を援用しつつ新たな作品解釈を求める方法、及びインターテクスチュアル・クリティシズム、即ち作品間の関連性を重視する方法により、難解なディキンソンのメイン・テーマである〈苦悶・絶望あるいは死〉等のネガティブ・イメージリーの重要性に焦点を当て、それらと不離の関係にある〈永遠・不滅〉との関連性を、深く分析し論究している。その力量は十分評価されてよい。

(2) 吳氏は作品解釈において緻密な分析を行っているが、それは膨大な研究資料から上記のテーマに即した多くの資料を集め、それらを誤解することなく適正に読みこなし、推論の過程で適宜有効に活用し得たからである。作品解釈に当たっては、先行研究の非は非として批判しそれに代わる独自の見解を提示するなど、ディキンソン研究における貢献度には顕著なものがある。

(3) 本論文の統一的な論点は、同詩人の卓抜な才能による〈擬人化〉の分析である。即ち〈苦悶や絶望〉あるいは様々な局面での〈死〉といった抽象的なものが様々に形而上的な変容を遂げていること、そうした〈擬人化〉によって詩人は前人未到の無意識の世界、死後の魂の世界、あるいは不滅と永遠の世界を執拗に探究したことが考察されている。その論究は深く、正鵠を得ている。例えば〈死〉が秘めている傲慢さ、あるいはその権能の計り知れない大きさについての分析は緻密であり、その推論には迫力がある。

(4) 吳氏の英語は口語的表現力に支えられたナチュラルなものであり、精彩があり、説得力がある。ここに至るまでの、よりよき英語への不断の鍛錬の形跡が窺える。

上記の評価できる点は別にして幾つかの不備な点が指摘できる。

(1) 専門家以外の読者には、論者自身の考察と批評家・研究者の見解とが一部錯綜していて、区別しにくいところがある。このことは序論でのディキンソンの研究動向の概説が不十分であること、及び論者の立場を明確にさせないままいきなり問題の核心に入っていることと関係している。

(2) ディキンソンのネガティブ・イメージリーの持つ詩的な内容と中国の孔子の思想との共通性を暗示するまではよいが、十分な孔子側の資料がなく緻密な論証がないまま、その共通性を何か新しい発見であるかのように述べるのは行き過ぎである。

(3) ディキンソンの作品が宗教的・哲学的内容を多分に含んでいるにもかかわらず、それらへの言及が希薄である。本論では文学的な作品解釈に力点が置かれているならば、その旨を明確に述べ、本論の研究の枠組をはっきりさせるべきである。また、項目立ては同レベルの内容でもってすべきであり、異質なものを並べてはいけない。

以上を総合的に判断し、当審査委員会は、本論文を博士の学位論文として認定することに、全員一致で合意した。